特278-51
1200501131500
特278
51
18枚
(欠のぞく)
事故本
10 又
2008.7.18
駿河

日本教育紙芝居協會作品

大空の子

定價 ㊥ 金貳圓貳拾錢

發行所　日本教育畫劇株式會社

始

大空の子
日本教高紙芝居協會

（龍平）

『ばんざアい、兵隊さん、ばんざアい。

隣村から出征する　兵隊さんの行列が、

蟻のやうに　小さく見えます。

龍平は　出征の兵隊さんが　ある度に、

この鎭守様の杉に登つて、いつまでも〳〵、

行列が　遠く消えて　見えなくなるまで、

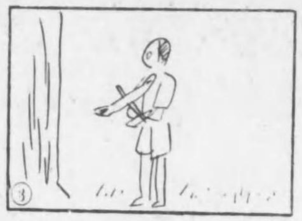
見送るのでした。

（元氣に唄ふ）

わが大君に　召されたる

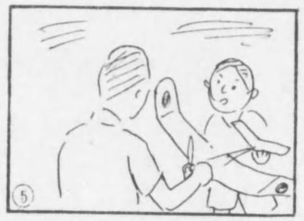
生命光榮ある　朝ぼらけ――。

（ぬ　く）

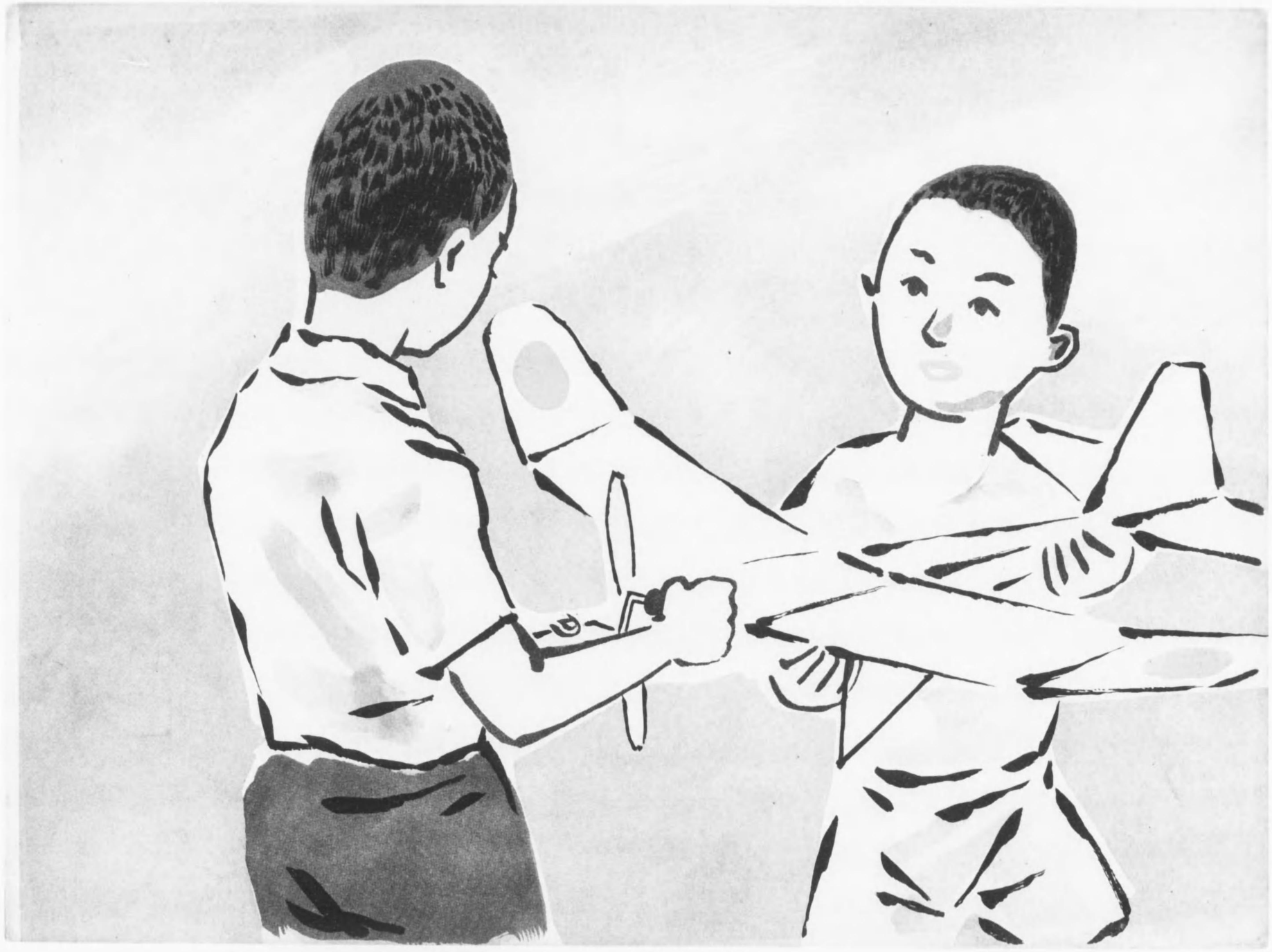


（龍太）
『龍平ッ……龍平ッ……降りて來い。』
いつの間にか　兄の龍太が　樹の下に立つて
見上げてゐました。
（龍太、大聲で）
『お前、勉強したのか？』
（龍平、小さく）
「……いゝや……」
（龍太、大聲で）
『鎭守様の杉に　登つていゝつて、
お母さん、おつしやつたのか？』
（龍平、小さく）
「……いゝや……」
（龍太、大聲で）
『それ見い、お前は　しよつちゆう　さうやつて、
お母さんに　心配かけてゐるんだ。』
（龍平）
「……」
（短い間）
（龍太、ずつと優しい聲で）
『龍平……降りてこいよ。』
（龍平）
「……」
（龍太、やさしく）
『早く降りてこいよ。』
（龍平、小さく）
『だつて……兄さん、ぶつんだらう？』
（龍太、やさしく）
『ぶたん……ぶたんから　早く降りてこいよ。ね、
試驗飛行やるんだから。』
（龍平、思はず聲をはづませて）
『えッ。試驗飛行？
ぢや　今すぐ降りるから　待つてて……』
（ぬきながら）
龍平は　試驗飛行と聞くと
眼を輝やかせて　降りて來ました。

（龍平）
『ねえ、兄さん。この飛行機、
あの杉の樹より　高く飛ぶかしら？』
（龍太）
『そりゃ、やつて見なきゃわからないよ。』
（龍平）
『ぢゃ、僕が　百まで數へてゐる間、飛ぶかい？』
（龍太）
『飛ばして見なきゃ　わからないよ。』
けれども　龍太は、本當は　自信があつたのです。
圖面だつて　正確に引いたし、
材料だつて　充分吟味したからです。
（ぬ　く）



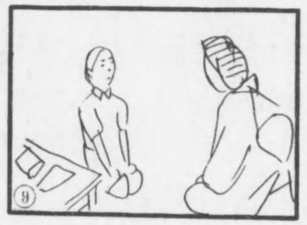
（龍平）
『ねえ、兄さん……。
兄さんは　やつぱり　飛行家になるのかい？』
（龍太、嬉しさうに）
『勿論、さうさ。そんなこと　きまつてるぢやないか。』
（龍平）
『兄さん、僕も飛行家になるよ。』
（龍太）
『……』
龍太は　龍平の言つてるのが
聞えなかつたやうな　ふりをして、
一生懸命に　プロペラを　捲いてゐます。
（龍平）
『ねえ、兄さん。
僕も　飛行家に　なるんだからね、いゝかい。』
（龍太、大きな聲で）
『龍平ッ。　しつかり持つてゐろッ。』
（ぬきはじめながら）
（龍太）
『そーら、飛ばすぞッ。』
（殘りを早くぬきをはる）



（龍平、叫ぶやうに）
『わァ。何んだい、兄さん。
この飛行機　駄目ぢやないか。
（二人、一生懸命で）
『頑張れェ！　頑張れェ！』
（龍太、おどろいて）
『あつ。危い！　自爆だッ！』
（ぬ　く）

（龍平）
『殘念だなア』。
（龍太）
『うん。殘念だなア、浮力が足りないんだな。
よう―し、もう一遍、新規蒔直だ』。
（　間　）
龍太と龍平は、暫くの間、どちらも默つて
吸ひ込まれるやうに　青い空を　みつめてゐました。
耳を澄すと、遠くに　蛙の鳴き聲や、
時々　かん高い　百舌の啼き聲が　聞えて來ます。
（龍太、親しく）
『ねえ、龍平』。
（龍平）
『何さ？　兄さん』。
（龍太、一語一語力をこめて）
『……お前も　飛行家に　なりたいだらうけど……
お前は、可哀想だけど、諦めろ……』
（龍平、不滿らしく）
『どうしてさ。兄さん！　そんなのあるかい。
いやだい　く』。
（龍太、さとすように）
『だつてね、龍平。僕とお前とが　飛行家になつたら
そして、若し　二人とも戰死したら、
お母さんを一体　誰がお世話するんだい？』
（龍平、不滿らしく）
『ちや、なぜ　兄さんだけは、
飛行家になつても　いゝんだい？』
（龍太）
『だつてね、兄さんは長男だもの。
長男が　お父さんの跡を繼ぐのが、
日本の　昔からの　しきたりなんだ』。
（龍平）
『……』
（しづかに　ぬ　く）

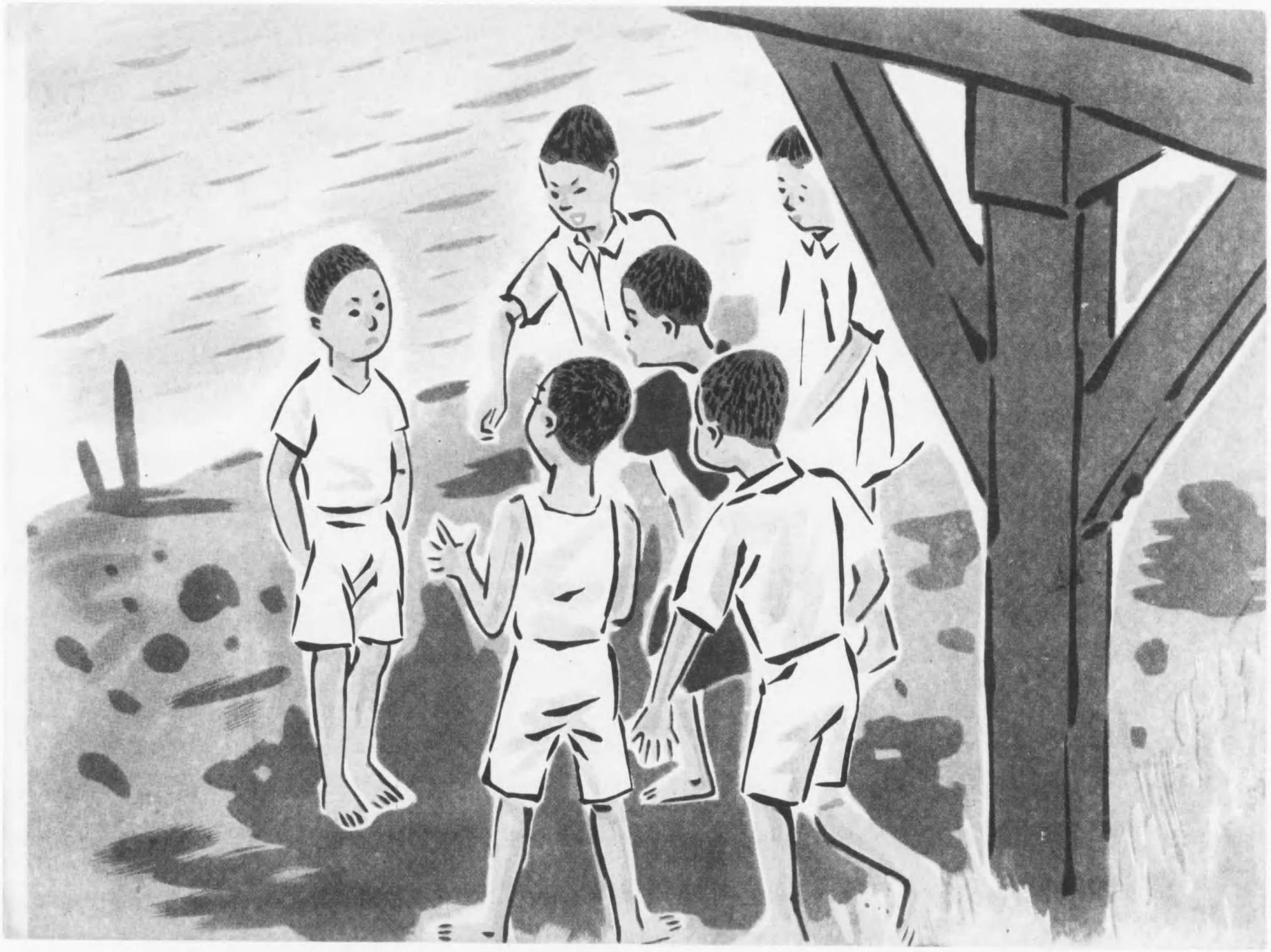
（龍太、呼ぶ）
『龍平ッ……龍平ッ。』
（短い間）
（龍太）
『龍平ッ……もう遅いから歸らうね。
暗くなると　お母さんが　心配するから、ね。』
（龍平）
『……』
（短い間）
（龍太）
『龍平ッ……龍平つたら……
（しづかに）
お前、怒つたのかい？』
（短い間）
（ぬきながら）
それから　二三日した或る日。



（母、しづかに）
『龍平は　近頃、鎭守様の杉に　登らないようだね』。
（龍太、おどろいて）
『えッ。ぢや、お母さんは、
龍平が　あの杉の樹に登るの　知ってたんですか？』
（母、しづかに）
『そりや　知ってるよ。』
（龍太、しほれて）
『僕、お母さんが　心配するから　よせ〳〵って
言ったんだけど……』
（　間　）
（母）
『れえ、お前、
龍平は　どこか身体の具合が　悪いのぢやないかねえ』。
（龍太）
『どうして？　お母さん。』
（母、しづかに）
『だって、近頃　ちっとも　元氣がないぢやないか』。
（龍太）
『……』
（靜かに　ぬ〳〵）

お母さんは、毎日　一度、かうして永い間、
お佛壇の前に　坐つてゐました。
そして、靜に眼をつぶつて　心を澄してゐると、
『龍太と龍平は　元氣かな。
二人とも　勉强してゐるだらうな』
と言ふ　優しい　お聲が
聞えてくるやうな氣がするのでした。
（ぬきながら）
（村の子供達の囃す聲）
『やーい　やーい、弱虫やい、
やーい　やーい、弱虫やい。』

欠



（龍平）
「お父さん！　お母さん！　僕は……
僕は、どうしても　飛行家になりたいんです。
若し　この欄干を　うまく渡ることができたら、
どうぞ　僕が飛行家になるのを　お許し下さい……。
そのかはり、うまく渡れなかつたら……僕は
諦めます……」
皆は固唾を飲んで　龍平を見守りました。
（三分の一位まで　ゆつくりぬきながら）
龍平は　そろりそろりと　歩いて行きました。
そして　丁度　橋の眞中頃まで　來た時でした。
（殘りを　早くぬく）

「あ――ッ！」

（短い間）

（ぬ　く）

（間）

（龍平、低く）

「兄さん。……僕、しくぢつちやつた……。

僕は　やつぱり飛行家になる　資格なんかないんだね。」

（短い間）

（龍平、小さくとぎれがちに）

「僕、大きくなつたら　飛行機に乗つて、

お父さんの　自爆なさつた空を

旋回飛行したいと　思つてゐたんだよ……。

兄さん……　僕、口惜しい。」

（龍太、一句一句力をこめて、とぎれがちに）

「馬鹿ッ、龍平の馬鹿ッ　いくぢなしッ……」

（ぬ　く）

（短い間）

（龍太）
『お母さん、お願ひです。
どうか　龍平を飛行家に　させてやつて下さい。
龍平は　飛行家になりたいのです。
僕は……　僕は　諦めます。だから、どうか龍平を
飛行家にしてやつて下さい。』
（母、優しく）
『龍太、お母さんはね、
今まで口に出してこそ　言はなかつたけれど、
お父さんの　戦死の報せを　受取つた時に、
お前達二人を　立派な飛行家に育て
大空に捧げることを、
お父さんと　はつきりお約束したのだよ。』
（龍太）
『……でも、お母さん。僕達二人が　飛行家になつて……
二人とも　戦死するやうなことがあつたら……僕……
お母さんが……　お母さんが……』（泣く）
（母）
『馬鹿だね、龍太は。そんなことを　心配してゐたのかい。
お母さんは、お前達二人が　立派に
お國の役に立つてくれゝば、もう　それでいゝのさ。
お母さんにとつて
こんな嬉しいことは　ありやしない。』
（ね　く）

（龍太、叫ぶ）
『お母さんッ。どうもありがとう』。
（龍平、叫ぶ）
『お母さんッ。どうもありがとう』。
龍太も、隣の部屋で聞いてゐた龍平も、嬉しくて、
お母さんに抱ついて　泣いてしまひました。
お母さんの笑顔にも　涙が光って居ました。
そして、龍太も龍平も、僕達のお母さんは、
日本一　良いお母さんだ、と心から思ひました。

（ゐ　く）

（母）

『あのね、お父さんは、
よくこんなことを　おつしやつていらつしたよ。

（　間　）

お前達も　知つてゐるだらうが、
飛行機は　針の先のやうな　一点で
支へることが出來るのだつてね、……で
お父さんの　仰るには……（父の聲を思ひつゝ）つまり、
飛行機といふものは　それ程均勢のとれたものなのだ。
だから、その飛行機を操縦する　飛行士も
よく均勢のとれた　立派な人物で　なければいけない。
先づ　身体が丈夫でなければ　いけない。
それから、どんな困難も乘り越える　忍耐と勇氣、
優秀な枝術と　人並勝れた頭腦、
それを　みんな兼ね備へて　ゐなければ
飛行機は　操縦できない。
だから　立派な飛行士になるのは
並大抵のことではないよ、つてね。』

（ぬきながら）

（村の子供達の聲）
『龍平ちやーん、遊ばうよ。』

（龍平）
『勉強やってるんだから駄目。宿題終つたら　遊ぶよ。』

（　間　）

（村の子供、一）
『龍平ちゃん、この前
弱虫だなんて云つて　御免ね。……
怪我したとこ　痛いかい？』

（龍平）
『ううん、もう痛くないさ。』

（村の子供、二）
『龍平ちゃん、僕も　あやまるよ。
龍平ちゃんは　弱虫どころか　僕達の大將だ。』

（村の子供、一同）
『さうだ〳〵、大將だ。龍平ちゃんは大將だ。』

（ぬ　く）

（村の子供達の唄ふ聲）

この陽　この空　この光り

アジヤは　明ける　嚴かに――。

今では　すつかり村の子供達の

大將になつてしまつた　龍平が、

得意になつて　大きな聲で　唄つてゐます。

（龍平）

「あッ兄さんだ、兄さーん、兄さーん、

きつと　模型飛行機が、でき上つたんだ。

こんどは　うまく飛ぶかなア？」

（ゐ　〳〵）

（子供達）
『わあーッ、飛んだ、飛んだ、凄いなあ。
雲の中に　は入ってしまふぞ。
ばんざァい。ばんざァい。』
龍太も龍平も、村の子供たちも、
みんな夢中になって、
まるで　本物の飛行機のように　氣持よく飛んでゐる。
模型飛行機の後を、
何處までも、何處までも、追ひかけてゆきました。
（終）

終